

書評

轟 亮

金沢大学
人間社会研究域人間科学系 教授

本書は、科学についてわかりやすく伝える「岩波科学ライブラリー」の一冊で、データを適切に収集するための方法である「サンプリング」をテーマとして、その基本的な考え方や応用例を説明している。

統計数理研究所では毎秋のイベント「子ども見学デー」で、子どもたちが楽しく体験してサンプリングを理解する、「BB弾サンプリング実験」(以下、BB弾実験)という出し物を行っている。そこで著者たちが説明を担当したり、研究所ホームページで公開されている解説文を執筆したりした経験から、本書は生まれたとのことである。

本書は3章構成で、第1章「サンプリングの有用性——その科学的根拠」(廣瀬)では、BB弾実験を例に、推定の統計学理論の基礎を説明している。水槽に白と黒のBB弾が計10万個入っており、この中の黒玉の個数を調べるのが課題である。イベント参加者のなかから実験協力者を募り、協力者ごと

に、水槽をまんべんなくかき混ぜてから、(同じ数の)BB弾をすくい、黒玉の個数(の推定値)を記録し、すくったBB弾を水槽に戻すという作業を行う。

本章では、サンプルサイズを300として、1,000人の協力者がBB弾の非復元単純無作為抽出を行ったとして、得られた1,000個の推定値の分布をヒストグラムで視覚化し、推定誤差について理解させている。さらに、サンプルサイズが推定誤差に与える影響も図示し、そこから進んで、推定値の平均、不偏分散、大数の法則、中心極限定理、正規分布、連続性補正法などの重要概念の説明がなされる。

第2章「世の中の動向を捉える——社会調査とサンプリング」(稲垣)は、まず社会調査とは「集団特性」を明らかにしようとするものだと定義し、BB弾実験も例にしながら、母集団、全数調査、標本調

査、計画サンプル、有効サンプル、有意抽出法/無作為抽出法、サンプリング台帳、単純無作為抽出法の難点など、社会調査のサンプリングに関する基礎を要領よく説明している。

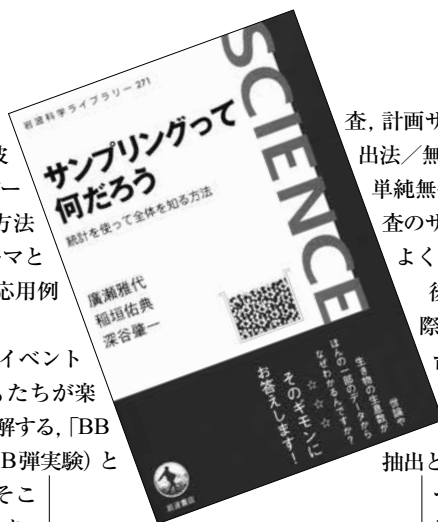
後半では、層化多段抽出法の実際が扱われ、多段抽出については、台帳閲覧と実査での訪問の負担という社会調査の実施上の理由を説明している。また層化抽出とは、「母集団の正確な(縮図)をつくるため、層に区分し、層の規模に応じて抽出することだ」とし、層化と多段抽出法を一緒に用いることで、精度と効率性を両立できることを説明している。

「日本人の国民性調査」の第13次調査は層化二段抽出法を用いており、その手順が具体的数値とともに紹介されている。さらに、回収率の低下などの社会調査の困難について述べ、今後のための指摘もなされており、考えさせられる内容となっている。

第3章「生物を数える——生態調査におけるサンプリング」(深谷)

は、生態学の領域で、野生動物の個体数を知る目的での「生態調査」がどのように行われ、どのように推定されるのかを紹介している。「捕獲再捕獲法」は、1回目の捕獲調査で捕獲した動物に標識をつけ、2回目の調査で再捕獲された個体の比率から、総個体数の推定値を得るものである(リンカーン-ペテルセン推定量と呼ばれる)。紙幅の関係で詳細は省くが、サンプリングの論理が他領域でどのように用いられているのかがわかり、とても参考になる。

本書は一般向けに書かれた良書で、社会調査士カリキュラムで推測統計学を学ぶ人にとっても、その理解を確実にする上でたいへんに役立つ副読本である。全編にわたってサンプリングの条件を守って入手した質の高いデータの重要性が強調され、特に今日、意義深いと言える。一読をお薦めしたい。



サンプリングって何だろう

統計を使って全体を知る方法

廣瀬雅代
稲垣佑典 著
深谷肇一岩波書店
2018年
B6判, 128ページ
1,200円+税

ひきこもり問題には固有の特徴がいくつかある。その一つが、親をはじめとする家族の立場である。本人に最も近く、対応が求められるだけでなく、しばしば問題の原因とされて陰に陽に非難を受ける。さらに、経済的、心理的負担を強いられ、時に暴力を受けるなど被害者の立場にも置かれる。このため、社会問題化やそれを訴えるクレームにおいて、家族の立場は一様でない。

〈ひきこもり〉と近接し、これに先立って社会問題化した〈不登校〉においては、親が被害者となったり潜在的被害者と位置づけられたりすることは稀で、彼らはもっぱら子どもの(利益の)代弁者として振る舞うことができる。それゆえ、社会問題化の過程においては、「不登校は病気ではない」という明確な主張(=非逸脱化のクレーム)で(ほぼ)まとまることのできた。

これに対してひきこもりは、不登校からの連続として起こることもしばしばあるが、状態が長期化するなかで、子どもは成人して保護や庇護を受ける立場ではなく、一方、親は高齢化して利用可能な資源が減少、喪失していくことで、それぞれの立場が変化する。このような長期化に伴って問題の範囲も拡張してきた結果、「7040問題」、「8050問題」が生じている。

また、一般的に子どもの成長や教育の期間とされる時期を過ぎることで、問題への対策やそこで想定される目標も拡散する。問題へのアプローチも教育、医療、福祉、労働など多領域にわたり、いずれかが支配的な地位を占めるわけではない。これらの意味でひきこもりは、他の社会問題以上に重層的で単純化できない、すべきでない問題である。



ひきこもりと 家族の社会学

古賀正義
石川良子 編

世界思想社
2018年
四六判, 228ページ
2,500円+税

こうしたユニークな構造を持つ社会問題であるひきこもりに対して、本書はその表題が示すように、ひきこもる本人と、否応なく当事者となる家族、さらに「親の会」など関係する組織をも視野に入れ、いくつかの方向から解きほぐし、リアルな見取り図を描くことを試みている。

問題の構造を的確にとらえることは、社会として問題に取り組むにあたっての大前提となる。

この役割を果たすべきアクターとしてメディアの力は大きい。それゆえにインターネットやSNSの普及により、極端な事例や極論を増幅させることが多くなっている。ここに、問題化に際して社会調査、とりわけ質的な調査が持つ重要性を見出すことができよう。

本書は現在進行中の社会問題に対する質的調査、それも広義の「言説研究」と位置づけられる。恣意的で数値が一人歩きしがちな各種「実態調査」や、事件を機にあふれるセンセーショナルな報道や論評など、外在的

な記述とは対照的に、本書は当事者に寄り添ってその声や語りを丁寧にする。その一方で、社会問題としてのひきこもりについての構築主義的な記述や実態調査の対象化も併せて行うことで、特定の当事者に特権的な地位を与えることなく、問題の構造を全体的に把握することに成功している。

折しも2019年には、ひきこもる本人が加害者となった凶悪事件と、家族が本人を殺害する事件が相次ぎ、問題についてのイメージや理解が極端な方向にぶれる兆しが生じた。本書によってこれが修正されることを期待したい。



樋田大二郎

青山学院大学
教育人間科学部 教授

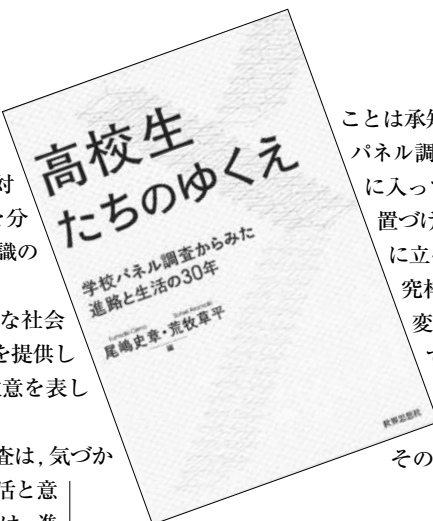
本書は、1981年、1997年、2011年と3回にわたって実施した高校3年生対象の質問紙調査のデータを分析して、高校生の生活と意識の変化に迫った報告です。

なによりもまず、大規模な社会調査を遂行し、貴重な知見を提供した本書の研究グループに敬意を表します。

長いスパンの繰り返し調査は、気づかぬうちに変化した生徒の生活と意識を明らかにします。本書は、進学率上昇の様相と意義、多チャンネル化、まじめさなどの変化とその背景を浮き彫りにしました。本書は当たり前すぎて意識されることのない今日の高校生の状況がかつては当たり前ではなかったことや当たり前になるに至った過程と要因を描き出しています。また、家庭的背景他の要因の影響力の歴史的変遷にも検討が及んでいることは、本書の重要な特徴です。

第Ⅰ部では進路希望と生活・社会意識(第1章)、就職希望者のプロフィール(第2章)、就職希望(第3章)のそれぞれに焦点を当て、30年間の変容を描き出します。第Ⅱ部では第Ⅰ部で浮かび上がった進路形成の問題を2011年実施の第3次調査データで分析します。家庭的背景(ひとり親家庭か否か)(第4章)、奨学金制度(第5章)、職業観・学歴観(第6章)です。さらに第Ⅲ部では生活構造と生活意識に焦点を当て、学校外教育利用とその規定要因(第7章)、高校生の生活時間(第8章)、生活満足度(第9章)を考察します。

高校研究の幅を広げるために研究グループにお願があります。本書の主眼は高校生研究である



ことは承知しています。しかし、私は「学校パネル調査」というネーミングをいたく気に入っています。本書は学校の社会的位置づけは容易には変化しないという前提に立っています(第1章)。たしかに、研究枠組みに高校の社会的位置づけの変化という変数を取り入れないことで、本書の取り上げた生活と意識の変化は明瞭になりました。しかし、1970年代の後半以降、高校増設と

その後の統廃合、学科新設などの高校構造の大きな変化があったことも事実です。また、同じ所在地、同じ高校構造のままであっても、保護者の社会階層や学歴、保護者の進路期待は高校ごとに異なる様相で変化しています。これらの結果、各高校への社会的要請が変化し、各高校の機能が変化していることも事実です。

高校構造や各高校の変化は本書で触れているメリトクラシー、多チャンネル化、社会的再生産、格差、ジェンダーなどに対してどのように影響したのか。高校の社会的位置づけの変化の部分に着目し、社会的位置づけの変化

が影響する変数にも着目することで、高校教育の変化と課題はより包括的に明確になります。高校の変化を追う学校パネル調査を行うことで、生徒パネル調査では捉えきれない高校教育の大きな変化が浮き彫りになるのではないのでしょうか。

最後に、第4章のひとり親家庭についての考察は、生徒の進路形成の3つの主要な分化の段階である家庭的背景による分化、義務教育段階の分化、高校入学後の分化の3者の関係を考えるうえで、新たな視点を与えるものであることを付言します。

高校生たちのゆくえ

学校パネル調査からみた
進路と生活の30年

尾嶋史章
荒牧草平

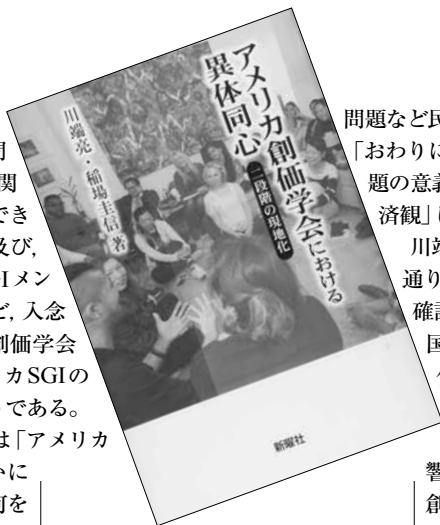
編

世界思想社
2018年
A5判、240ページ
2,500円+税

この2冊を併せて読むことにより、著者3名が10年間の調査で得たアメリカSGIに関する研究成果の全体像が理解できる。調査地はアメリカ各地に及び、計15回の訪問で70人以上のSGIメンバーにインタビューを行うなど、入念な調査に基づく。その都度、創価学会の国際関連部署の職員やアメリカSGIの職員から手厚い助力を得たようである。

両書の課題は、秋庭(2017)は「アメリカ合衆国の人びとがなぜ・いかにSGI-USAのメンバーとなり、何を願って信仰を継続しているのか、創価学会もSGI-USAも知らない一般読者にも理解できるように明らかに」すること、川端・稲場(2018)は秋庭(2017)が記述した55年の歴史における「意味と組織の変容に特に焦点をあてて、分析、考察する」ことである。

秋庭(2017)の内容は1960年から現代までのSGI-USAの通史である。第1章「ハワイから西海岸へ」では、戦争花嫁が伝え広め、「日本語より英語に堪能な、しかし同時に、日本の文化伝統や組織原理を斟酌できる能力を備えた」日系二世とともに組織化された1960年代前半を対象としている。第2章「成熟から停滞へ」では、初代理事長ジョージ・M・ウィリアムス(貞永昌靖)が体現する「日本的な思考法」に基づいたコンベンションや大量折伏に会員の総力を結集していく中で、その強制力の強い組織運営への反発が表面化する70年代後半までをとらえる。第3章「波濤を越えて」では、アメリカ国内での混乱と宗門問題という日本における混乱を越えるために一時期退潮していたコンベンションと大量折伏の再来があった1980年代を考察。第4章「広布千年の基礎」では、1990年代以降に池田より「ウィリアムスとは全く違うことをやれ!」と指導された新しい理事長のもとでの「ダイバーシティ委員会」設置や女性の役職への登用



アメリカ創価学会 <SGI-USA>の55年

秋庭 裕 著

新曜社
2017年
四六判, 280ページ
1,800円+税

アメリカ創価学会に おける異体同心

二段階の現地化

川端亮・稲場圭信 著

新曜社
2018年
四六判, 232ページ
1,600円+税

問題など民主的な組織改革に触れている。「おわりに」では本書の課題に対し、「唱題の意義と、一生成仏という現世的救済観」に一定の答えを求めている。

川端・稲場(2018)の内容は次の通りである。序章で歴史を簡潔に確認した後、第1章「アメリカ合衆国における日蓮仏法」にて、「異体同心」が多民族社会アメリカにおいて独自の理解を生んだこと、日本の宗門問題の影響のもとでLGBTグループの創設が生じたことを描く。第2章「SGI-USAへの入信と回心過程」では、章タイトルの観点をアメリカ合衆国社会が持つ特色とSGIの組織力が個人に与える影響に注意してまとめている。第3章「組織のアメリカ化」では、日本の組織でも生じたタテ線組織がヨコ線組織へと移行する過程とその理由をSGI-USA独自の歴史的展開と関連付けて説明している。第4章「二段階のアメリカ化—翻訳の重要性再考」では、海外布教において重要な論点となる翻訳の問題を取りあげ、「日本語が透けて見える英語」から「自然な英語」への二段階の過程を詳細に捉えている。第5章「アメリカにおける師弟不

二」では、この教えが、翻訳の問題や宗門問題の影響を経て、日本とは異なる考え方をもとにして受容されてきた状況を明らかにしている。

全体的に示唆に富む両書であるが、特に有意義なのは、女性の役職登用、セクシュアル・マイノリティのメンバーの正式な組織化など、組織の変容を引き起こした要因について、両書ともにジェンダーを重要な論点として取り上げている点である。

一方で、現SGI-USAの「正史」に基づいた解釈なのではと感じられる部分もあり、「カタキ役」とされた初代理事長の立場から見た歴史など、両書で描かれなかった部分への想像力も掻き立てられた。



小宮友根

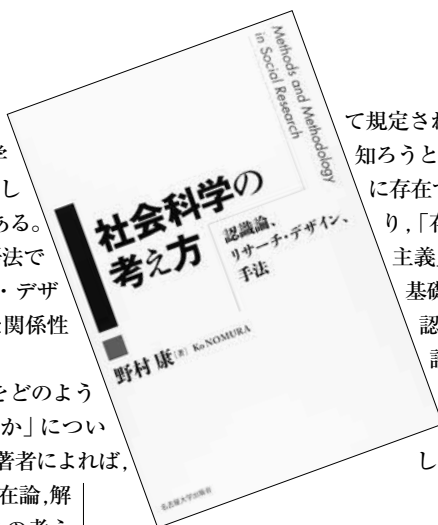
東北学院大学
経済学部 准教授

本書は「方法論」という観点から社会科学の研究法に統一的な見通しを与えようとする著作である。「方法論」とは、本書の用語法では、「認識論」、「リサーチ・デザイン」、「手法」の一貫した関係性のことを言う。

「認識論」とは「世の中をどのように認識することができるか」についての考え方であるという（著者によれば、それは実証主義、批判的実在論、解釈主義に大別される）。この考え方に沿って「リサーチ・デザイン」（事例研究なのか実験なのか横断的・縦断的研究なのか）が選定され、さらにリサーチに求められるさまざまな手法（インタビュー、調査票調査、エスノグラフィ、言説分析など）が定められる。こうした整理によって、さまざまな社会科学的研究を統一的な観点から把握・比較することが可能になるというわけだ。

本書がきわめて啓発的なのは、何らかの研究法や調査手法が採用される際にしばしば暗黙の前提となっている「社会」観を、「認識論」と本書が呼ぶ観点にまで遡って明るみに出すことで、研究法や調査手法の「選択」がどんな立場選択であるのかについての自省を読者に強く促しているところである。アドホックな選択をして何がしたいのかよくわからない研究をしてしまうことを避けるためにはもちろんのこと、自分の専門ではない研究をよりよく理解するためにも、本書が呈示する視点は役立つだろう。さまざまな研究法や調査手法を幅広くカバーしていることも本書の意義を大きなものにしていく。著者の言うとおり、大学院におけるリサーチ・トレーニングにも有効だろう。

他方、疑問もないわけではない。著者によれば本書でいう「認識論」は、さらに「存在論」によ



社会科学の考え方

認識論、リサーチ・デザイン、手法

野村 康 著

名古屋大学出版会
2017年
A5判、358ページ
3,600円+税

て規定されている。「存在論」とは「私たちが知ろうとする対象が、私たちとは独立にそこに存在するかどうか」をめぐる議論であり、「存在する」という立場が「基礎づけ主義」、「存在しない」という立場が「反基礎づけ主義」と呼ばれている。そして、認識論のうち、実証主義と批判的実在論は基礎づけ主義に規定され、解釈主義は反基礎づけ主義に規定されると言われている。

しかし、たとえばDVの被害経験率を調べようとする実証研究でも、どんな行為がDVにあたるかが私たちの行為理解ないし解釈から独立に決まると想定されているわけではないだろう。むしろどんな行為をDVに数えるかという問題に調査者は強く気を配るはずだ。したがってそうした研究と、たとえばDVをめぐる人々の解釈実践を探索する研究との違いは、「対象が私たちから独立に存在するか」という問いへの答えに必ずしも依存するわけではないように思われる。

私見では、そこにあるのは特定の行為概念を前提として研究

上の問いを設定するか、行為概念の用法そのものを研究上の問いとするかという、オーダーの違いと考えたほうがよい。「存在論」上の区分に対するこうした疑問は、当然ながら認識論以下の「方法論」全体にも波及する。

とはいえ、もちろんこうした疑問は本書の価値を損ねるものではない。社会学の領域でも、「量的／質的」というあまり役に立たない区別のもとで、研究法や調査手法の方法論的意味を省みることが妨げられ、アドホックな手法選択や異なる方法論間での相互無理解が生じているのではないかという危惧を筆者も抱いている。本書のようなメタ視点からの整理にもとづく議論の深化は、社会科学に強く求められていることであろう。